

## 学 位 論 文 要 旨

## 研究題目

Change in Feeding and Swallowing Function in Elderly Patients with Isolated Hospitalization for COVID-19: A Retrospective Cohort Study

(COVID-19 のため隔離入院となった高齢患者における摂食・嚥下機能の変化：  
後ろ向きコホート研究)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻 環境病態制御系 臨床研究学 (指導教授 森本 剛)

氏 名 濱崎 健弥

【背景】 Coronavirus disease 2019 (COVID-19) の高齢患者では、隔離に伴い食事介助などのケアの質が低下するため、摂食・嚥下機能低下が懸念される。しかし、COVID-19 患者における摂食・嚥下機能の変化と予後との関連については十分に検討されていない。

【方法】 2021年12月1日から2023年3月31日までに神戸市立医療センター西市民病院へ入院した65歳以上のCOVID-19患者を対象とした。発症前から十分な経口摂取が出来ない (Functional Oral Intake Scale (FOIS) 1~3) 患者は除外した。FOISを発症前と退院時に測定し、発症後180日間の死亡率を評価した。主要評価項目は入院中のFOIS低下度数とした。院内死亡はFOISの4レベル低下とみなした。副次評価項目は180日死亡率とした。データは電子カルテレビューと電話調査により収集した。順序ロジスティック回帰モデルを用いて、発症前FOISとFOIS低下度数との関連を調整共通オッズ比で評価した。共変量は年齢、性別、身体的フレイル、併存疾患、認知症、ワクチン接種歴、COVID-19重症度とした。また、隔離期間の長さを14日で区切り、FOIS低下度数をWilcoxonの順位和検定により比較検討した。FOIS低下度数と180日死亡率の関連はカプランマイヤー法で評価した。【結果】 研究期間に337名を登録した。発症前FOISの分布は7: 190人、6: 89人、5: 40人、4: 18人であった。COVID-19重症度は各群で概ね類似していた。生存退院者289人のうち138人(47.8%)において入院中にFOISが少なくとも1低下した。発症前FOIS7と比較した調整共通オッズ比は発症前FOIS6: 2.23 [95%信頼区間 1.27-3.92]、5: 2.96 [1.46-6.05]、4: 2.89 [1.14-7.40]であった。隔離期間が14日を超えるとFOIS低下度数中央値は0から1に有意に増加した。生存退院した287名において、FOIS低下度数は180日死亡率と有意に関連していた。【考察】 COVID-19で隔離された高齢患者において、発症前FOISが低いほど入院中のFOIS低下度数が大きかった。また、隔離期間が長いほどFOIS低下度数が大きくなり、FOIS低下度数は退院後死亡率と有意に関連していた。本研究では人工呼吸患者はわずかであったため、気管内挿管による影響は限定的で、隔離に関連した身体活動量や食事介助、嚥下リハビリテーション、音声コミュニケーションの減少や孤独感などの要因が機能低下に寄与した可能性がある。【結論】 COVID-19により入院隔離された高齢患者は摂食・嚥下機能が低下しやすく、その低下は退院後死亡率と有意に関連していた。ハイリスク患者の摂食・嚥下機能を注視し、積極的な摂食・嚥下への介入や早期の隔離解除を行うことが予後改善に繋がる可能性がある。